

スナ期が明けたことに加え、予想分配率の引上げ  
 気運をながめて顧客が買控え姿勢をとったため、  
 設定が391億円(前月561億円)にとどまったこと  
 による。この間運用面では、各社とも目先債券利回  
 りの上昇を見越して、前月同様債券購入は元本純  
 増額の半分強にとどめ、残りの相当部分をとりあ  
 えずコール市場で運用する仕振りが目だった。

## 実体経済の動向

### ◇製品在庫率は高水準

(生産—前月著減のあと横ばい)

7月の鉱工業生産(速報、季節調整済み、前月比)は、前月著減(-3.5%)のあと横ばいにとどまった(前年同月比-1.7%)。これは、繊維、窯業・土石、紙・パルプ、電気機械、金属製品等多くの業種が生産調整を継続しているうえ、これまで順調な原油入着を背景として高水準の生産を続けた石油製品も、一部品種(C重油等)の在庫圧迫が強まってきたことからかなりの減産に踏み切ったためである。この間、鉄鋼(鋼板)、非鉄金属(アルミ)は輸出が好調のうえメーカーの在庫積み増し意欲が根強いことなどから増加し、自動車も8月の夏季休暇集中を控えた繰上げ増産から大幅な増加となった。特殊分類別にみると、耐久消費財(乗用車<1,500cc以下>、エアコン<スプリット型>等)が増加したものの、建設資材(アルミサッシ、セメント、鉄筋コンクリートパイル等)、一般資本財(金属工作機械、化学機械、ポンプ等)

### 鉱工業生産の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減(-)率・%)

	48年		49年		49年		
	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	5月	6月	7月
鉱工業指数	131.2	135.1	132.3	129.5	131.9	127.3	127.3
前期(月)比	2.6	3.0	-2.1	-2.1	2.0	-3.5	0
前年同期(月)比	18.1	16.2	7.4	1.3	2.6	-1.9	-1.7
投資財	5.0	4.7	-2.8	-0.6	3.3	-3.6	0.8
資本財	7.1	6.0	-3.5	1.7	4.1	-4.0	1.9
同(輸送機械を除く)	9.3	8.0	-5.5	5.9	5.4	-3.7	-1.7
輸送機械	1.4	2.2	-0.5	-5.7	0.2	-8.4	—
建設資材	0.4	1.5	-1.4	-6.0	0.6	-2.9	-2.6
消費財	2.0	2.1	-2.1	-1.4	4.0	-3.4	1.9
耐久消費財	1.0	2.0	-1.2	-5.1	8.8	-3.0	2.6
非耐久消費財	2.7	2.4	-2.5	1.6	1.1	-3.4	-0.1
生産財	1.0	2.2	-1.1	-4.0	0	-4.1	-0.6

- (注) 1. 通産省調べ、49年7月は速報。  
 2. 前年同期(月)比は原指数による。

がかなりの減少を続けたほか、生産財(伸銅品、塩ビ、段ボール原紙、合繊、毛・絹・合繊織物等)、非耐久消費財(灯油、服類等)も小幅ながら引き続き減少した。

なお、製造工業生産予測指数(予測時点8月10日、季節調整済み、前月比)によると、8月は第一次金属(鉄鋼、非鉄)、化学の増加が見込まれるものの、機械(鉄道車両を除く、船舶)、軽工業(紙・パルプ、繊維等)を中心に-0.5%と減少する見通しとなっている。

(出荷—微増)

7月の鉱工業出荷(速報、季節調整済み、前月比)は、+0.2%(船舶を除くと+0.6%)の微増にとどまった(前年同月比-5.4%)。これは、輸出が引き続き堅調に推移しているものの、公共投資、民間住宅投資の減退が続いているうえ、これまでかなりの回復を示していた民間設備投資、個人消費も長梅雨の影響も加わってやや増勢一服となっているほか、主要業界の減産進捗を背景に生産財需要が引き続き減退しているためである。

特殊分類別にみると、非耐久消費財、建設資材が前月著減の反動増のほか、輸出の増加(印刷用紙、鋼管等)や先行きのメーカー販売引上げを見

越した仮需の台頭(合成洗剤、ガラス)もあって増加し、耐久消費財も8月の夏季休暇集中を控えた自動車の出荷促進を主因に増加したが、一般資本財(金属工作機械、トラクタ<装軌式>、ポンプ、電動機等)が引き続きかなりの減少となった。この間、生産財は引き続き減勢にあるものの、輸出の増加(鋼板、化学肥料、合成樹脂、電気銅、アルミ地金、段ボール原紙等)に支えられ、減少幅はわずかにとどまった。

(製品在庫—引き続き増勢鈍化)

7月の鉱工業生産者製品在庫(速報、季節調整済み、前月比)は、前述のような生産調整の動きを反映して+3.3%と引き続き増勢鈍化を示している(前年同月比+33.8%)。しかし、在庫の増勢は出荷のそれをなお上回っているため、製品在庫率(45年=100、季節調整済み)は122.6と前月(118.8)に引き続き上昇した。

特殊分類別にみると、非耐久消費財が小幅ながら減少に転じ、建設資材、生産財も引き続き増勢鈍化となったが、一般資本財は出荷の減少を映じて急増、耐久消費財も8月の夏季休暇集中を控えた繰上げ増産(自動車)の影響もあってかなりの増

鉱工業出荷の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)比増減(-)率・%)

	48年		49年		49年		
	7~9月	10~12月	1~3月	4~6月	5月	6月	7月
	鉱工業指数	132.2	136.2	130.9	127.0	129.7	124.7
前期(月)比	1.9	3.0	-3.9	-3.0	2.4	-3.9	0.2
前年同期(月)比	16.6	15.3	4.2	-2.1	-1.4	-4.6	-5.4
投資財	3.8	4.5	-6.0	2.5	4.1	-4.8	-0.4
資本財	6.3	5.4	-6.9	6.3	6.3	-5.8	-0.7
同(輸送機械を除く)	8.7	8.0	-6.5	4.4	6.0	-4.0	-2.3
輸送機械	1.3	2.2	-8.0	9.6	4.6	-9.3	-
建設資材	0.2	2.1	-5.6	-4.6	2.6	-2.8	1.4
消費財	1.8	3.1	-3.4	-5.7	3.4	-2.4	2.7
耐久消費財	2.7	2.0	-4.8	-9.7	5.5	-0.7	2.3
非耐久消費財	1.1	3.8	-2.0	-2.9	1.6	-3.8	3.6
生産財	0.4	2.5	-3.1	-5.2	5.3	-3.6	-1.0

(注) 1. 通産省調べ、49年7月は速報。  
2. 前年同期(月)比は原指数による。

鉱工業製品在庫の動向

(季節調整済み、特殊分類別は前期(月)末比増減(-)率・%)

	48年(期別)		49年(期別)		49年(月別)		
	9月	12月	3月	6月	5月	6月	7月
鉱工業指数	117.4	117.0	127.8	148.2	142.7	148.2	153.1
前期(月)末比	2.5	-0.3	9.2	16.0	4.2	3.9	3.3
前年同期(月)末比	-0.7	1.4	12.3	29.4	24.2	29.4	33.8
製品在庫率	88.4	87.6	103.4	118.8	110.0	118.8	122.6
投資財	5.8	8.4	16.4	19.4	4.1	3.9	4.3
資本財	8.3	13.9	19.2	23.3	6.3	2.6	6.9
同(輸送機械を除く)	8.5	13.7	16.6	19.8	6.0	2.9	5.6
輸送機械	7.0	10.8	38.7	37.2	4.6	-1.1	10.7
建設資材	2.9	2.6	13.1	14.6	2.6	4.2	1.4
消費財	2.2	-3.2	4.6	14.7	3.4	2.4	2.4
耐久消費財	-0.2	-4.2	8.9	21.5	5.5	3.4	3.8
非耐久消費財	3.6	-2.4	1.8	9.7	1.6	2.3	-0.2
生産財	1.7	-2.8	9.2	15.5	5.3	5.0	3.1

(注) 1. 通産省調べ、49年7月は速報。  
2. 前年同期(月)末比は原指数による。

加となった。この間、ここへきて在庫が減少に転じた品目(アルミサッシ、セメント、合成ゴム、服類、電線ケーブル、乗用車<1,000~1,500cc>、カラーテレビ等)が最終製品を中心にかなりみられはじめている。一部(電線ケーブル、乗用車<1,000~1,500cc>)では在庫調整が完了に近づきつつあるものも見受けられるが、大半の品目ではなお在庫水準は高く、当面需要の本格的な立直りが見込まれないかぎり在庫調整が続く公算が大きい。

なお、5月時点調査の日本銀行「短期経済観測」によれば、主要企業(製造業)の在庫率は、製品在庫率、原材料在庫率ともに大幅な上昇を示しており、これに対応して製品在庫、原材料在庫の過剰感は、調査開始以来のピークとなっている。

もっとも、先行き12月にかけては売上げ増加期待もあり、このような在庫過剰感は多少軽くなると見込まれている。

#### (原材料在庫——6月は増勢強まる)

製造工業原材料在庫(速報、季節調整済み、前月比)は、2月(+2.5%)をピークに5月まで増勢鈍化を続けてきたが、6月には+2.0%と再び増勢を強めた(前年同月比+14.7%)。これは、生産調整の広範化を映じて原材料消費が鉄鋼を除くほとんどの業種でかなりの減少となったためである。メーカーの原材料新規手当て意欲は、入着高水準の一部輸入原材料(銅鉱、原油、製紙パルプ等)を除けば、このところ総じて落着き傾向となっている。

この結果、原材料在庫率指数(45年=100、季節調整済み)は117.7(前月113.1)と引き続き上昇し、前回在庫調整期のピーク(46年10月118.4)に接近した。

特殊分類別にみると、国産素原材料(鉄くず、故紙、原料油脂)は減少したものの、輸入原材料は銅鉱、原油、製紙パルプ等の入着高水準を映じて増加し(一方鉄鋼原料は鉄鋼生産の高水準から減少し、繊維原料も在庫調整の進展からおおむね減少)、国産製品原材料も生産調整に伴う消費の

### 製造工業原材料在庫および在庫率の推移

(季節調整済み、前期(月)末比増減(-)率・%)

	48年(期別)	49年(期別)		49年(月別)		
	12月	3月	6月	4月	5月	6月
在庫指数	132.0	140.9	145.2	142.0	142.3	145.2
前期(月)末比	1.9	6.7	3.1	0.8	0.2	2.0
国産分	4.1	7.4	1.6	0.6	0.4	0.6
素原材料	0.6	1.3	5.9	1.9	0.9	3.2
製品原材料	4.4	7.8	3.2	0.7	0.3	2.2
輸入分	-4.6	1.8	6.6	1.9	0.9	5.5
素原材料	-5.4	1.9	4.3	1.8	2.3	4.9
在庫率指数	102.9	111.6	117.7	113.1	113.1	117.7
国産分	102.3	111.8	116.5	112.9	113.4	116.5
素原材料	90.3	90.7	86.0	89.2	87.4	86.0
製品原材料	105.8	116.3	123.1	117.3	118.3	123.1
輸入分	104.1	107.9	116.6	113.0	108.7	116.6
素原材料	104.5	108.5	114.3	113.1	106.9	114.3

(注) 通産省調べ、49年6月は速報。

急減を主因に増加(金属製品用普通鋼鋼材、製紙パルプ、塩び等)した。なお国産製品原材料のうち、段ボール原紙、繊維原料は大幅な在庫調整を映じて引き続き減少した。

#### (販売業者在庫——5月は増加)

5月の販売業者在庫(速報、季節調整済み、前月比)は+1.9%と増加した(前年同月比+11.6%)。鋼材が値上げを見越した特約店筋の仮需増大から増加し、機械器具のうちルームクーラーでは需要回復を見込んだ在庫積み増しがみられた。また、紙、糸、非鉄地金等は大幅な需要減退から依然としてかなりの増加を続けており、自動車、石油製品も引き続き増加した。他方、織物は総じて在庫調整が続いており、繊維原料も綿花、羊毛の入着の集中から増加したものの、基調としては減少傾向にあるとみられる。

### 販売業者在庫の推移

(季節調整済み、前期(月)末比増減(-)率・%)

	48年(期別)	49年(期別)		49年(月別)		
	9月	12月	3月	3月	4月	5月
総合指数	129.7	133.6	138.0	138.0	136.4	139.0
前期(月)末比	1.5	3.0	3.3	0.9	1.2	1.9

(注) 通産省調べ、49年5月は速報。

## (設備投資——一般資本財出荷は引き続き減少)

7月の一般資本財出荷(速報、季節調整済み、前月比)は前月(-4.0%)に引き続き-2.3%と減少した。3か月移動平均値の前月比でみても4月(+3.6%)、5月(+1.8%)、6月(+0.2%)と増勢鈍化傾向にある。電子計算機、工業計器等の大型プラント付属装置や農業機械は引き続き増加しているものの、土木建設機械(トラクタ<装軌式>、ショベル系掘削機)が長梅雨に伴う建設工事進捗難からユーザー側が引取りを遅らせていることもあって低調のほか、金属工作機械、圧延機械、化学機械、ポンプ等もこれまでの設備投資復元が一巡したことから減少した。

一方、7月の機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み、前月比)は+14.3%と4か月連続の増加となった(前年同月比+30.2%)。製造業向け(+15.3%)では化学、鉄鋼向けが前月著増の反動から減少し、自動車、窯業向けも減少したものの、石油精製向けが一部既受注分の価格引上げもあって著増となったほか、繊維、機械、紙・パルプ、造船向け等も合理化関連設備を中心にかなりの増加となった。また非製造業向けも電力向けの大口成約を主因に大幅増加となった。

7月の建設工事受注額(民需、速報、季節調整済み、前月比)は、前月増加(+10.8%)のあと-3.8

と再び減少し、3か月移動平均値の前月比でも4月(+4.5%)、5月(+2.8%)増加のあと、6月(-0.3%)は減少した。これは、石油ショックを契機として手控えられていた案件の成約が一巡したうえ、鉄鋼、化学、石油精製などからの新規引合については決済条件面で折合いがつかない事例が増えてきたためである。

この間、日本銀行「主要企業短期経済観測」(8月調査)によれば、49年度設備投資計画(製造業、工事ベース)は、前年度比+26.7%と前回調査時(5月、+24.2%)に比べ若干の増額修正となったが、数量ベースでは同-3.8%の減少と、前回調査に比べ若干の下方修正となっている。業種別にみると、繊維、紙・パルプ、窯業等は引き続き低い伸びとなっているのに対し、鉄鋼、化学、石油精製などは高い伸びを示している。

## ◇商品市況は軟調の中にも一部で下げ止まり

8月中の商品市況をみると、末端需要の不振が目だつ繊維が一段安となり、紙、石油製品(灯油を除く)、合成樹脂(とくに塩ビ)も軟調を続けたが、月央ごろまで弱地合いで推移した鉄鋼、亜鉛等が下旬入り後下げ止まりないし小反発商状を示したほか、砂糖、アルミ、セメントが月中を通じて上伸した。

これは、①前月認可をみたメーカー建値引上げが徐々に浸透しつつあること(アルミ、セメント)や価格凍結の解除を契機に先行き値上げ予想が強まったこと(鉄鋼)に加え、②大手自動車メーカーの増産計画が伝えられたこと(鉄鋼)や、③海外高(砂糖、亜鉛等)なども響いている。もっとも、需給地合いは総じてみれば末端需要の低迷持続に加え、主要業界の減産や流通在庫の調整進捗などを背景として依然として軟調に推移しており、このため、たとえばセメント、アルミの値上げ交渉もかなり難航しているのが実情である。

鉄鋼……8月の鋼材市況は、月央までは総じて前月来の訂正安基調を続けたが、下旬入りとともに厚板、形鋼等の一部で小反発の動きもみられるなど総じて下げ止まり商状となった。

## 需要先別機械受注の推移

(季節調整済み、月平均、単位・億円)

	48年			49年		
	10~ 12月	1~ 3月	4~ 6月	5月	6月	7月
民需	4,545	2,236	3,418	3,486	3,637	4,092
	( 25.3)	(-50.8)	( 52.8)	( 11.3)	( 4.3)	( 12.5)
同(船舶を除く)	3,985	2,018	3,004	3,024	3,314	3,787
	( 36.2)	(-49.4)	( 48.8)	( 13.2)	( 9.6)	( 14.3)
製造業	2,659	1,128	1,690	1,503	2,028	2,337
	( 45.3)	(-57.6)	( 49.8)	(- 2.3)	( 34.9)	( 15.3)
非製造業	1,926	1,119	1,664	1,980	1,455	1,765
	( 7.0)	(-41.9)	( 48.7)	( 27.2)	(-26.5)	( 21.3)
同(船舶を除く)	1,361	903	1,297	1,527	1,233	1,501
	( 21.3)	(-33.6)	( 43.6)	( 35.1)	(-19.2)	( 21.7)

(注) 経済企画庁調べ、カッコ内は前期(月)比増減(-)率(%)。

これは輸出の堅調持続等から需給バランスがさほど崩れていないうえ、①8月10日に小形棒鋼、中形形鋼、厚板等の価格凍結が解除されたため、スクラップ価格高騰から赤字採算に悩む平電炉メーカーが早晚値上げしようとの見方が強まったこと、②大手自動車メーカーの増産計画により、冷延薄板を中心にひもつき段階の需給がタイト化しつつあるため、市中手当てが始まるとの期待が広まったこと、などから市中に底値感が強まり、主として特約店筋が小口ながら在庫補充買いに転じたことによるものである。もっとも、主力の建設向け需要が低迷を続けていることもあって末端ユーザー筋にはさして動意がうかがわれないことから、市況が上伸基調に転じたとみるのは時機尚早との見方が一般的である。

この間、くず鉄については需給引き締まりを映じてじり高を続け、下旬には本年5月のピーク時に迫る水準となったが、月末近く、値ごろ感から集荷意欲が高まったこともあって発生が増加し、上げ止まりから一部では小反落に転じた。

繊維……8月中の繊維市況をみると、合織が脱落したほか、綿糸が急落後下旬に反発したものの47年末以来の10万円台割れとなった。また、そ毛糸、生糸もそれぞれ月中を通じて下げ続け、それぞれ46年2月、48年2月の水準にまで落ち込んだ。

これは、流通在庫の調整が引き続き進捗しているほか、①依然として末端需要に動意がうかがわれないこと、②輸出成約が難航していること(とくに合織)、など需要不振が続いている反面、供給面では、①市況立て直しのかぎを握るとみられていた減産が、労働組合との賃金保障交渉難航やメーカー間の足並みの乱れなどから期待どおり進捗していないこと、②輸入圧迫が依然解消していないこと、などを映じて、メーカー在庫が異常な高水準にあるためである。

非鉄金属……8月の非鉄金属市況をみると、鉛は前月来の地合いを受けて保合いで推移したが、銅が一高一低のうちにも小幅ながら水準を高め、亜鉛が月末近く小反発したほか、アルミも小幅続

伸するなど、総じてみれば小幅上伸となった。

この背景をみると、①銅については、電線、伸銅等一部ユーザーが在庫調整の進展や値ごろ感から当用買いの範囲ながら玉手当てを進めているのに対し、供給面では、ユーザーの減産に伴う自家発生くずや故銅の減少から市中出回り玉が少なくなっているため需給が引き締まりぎみとなっていること、②亜鉛については、輸出価格の反発傾向を映じて月央以降強含んでいたが、とくに月末近く、海外生産者価格の引上げ予想から、国内建値の再引上げも見込まれるに至ったこと、③アルミについては、精錬メーカーが通産省の値上げ認可をてこに強腰で値上げ交渉に臨み、圧延メーカーも結局これを全額のみざるをえなかったことから、その浸透とともに市中相場も上昇したこと、が指摘できる。

石油製品……8月の石油製品市況は、17日に3月18日以来実施されていた石油製品の元売り行政指導価格が家庭用灯油およびLPGを除いて5ヵ月ぶりに撤廃されたものの、需給緩和の持続を映じて総じて弱保合いに推移した(注)。

(注) 指導価格撤廃が見送られた家庭用LPGについては小売標準価格が15.4%アップの1,500円/10kgとなった(20日に実施)ほか、家庭用灯油についても9月上旬には新標準価格が設定されるものとみられる。

セメント……セメント市況は、値上げ認可(7月20日以降、バラ物の場合+22~27%)に伴うメーカー建値引上げを映じて上伸した。

メーカー建値引上げの浸透状況をみると、小売店向けの袋物および系列メーカーが主力のコンクリート・パイル等二次製品向けバラ物についてはかなりの浸透をみている。しかしながら主力の生コン向けバラ物については、生コン・メーカーのゼネコン筋との値上げ交渉が難航しており、またすでに妥結をみた向きでも、生コン・メーカーの希望した値上げ幅をかなり下回っていることから、セメント新価格の完全浸透にはなお時間を要するとの見方が多い。

この間、需給面をみると、出荷は7月に前年比

11%減のあと、8月も20日までで同10%減(国内向けは同13%減)と不振を続けている。このためメーカー側では減産幅をいっそう拡大している(生産の前年比6月-7%、7月-12%)が、在庫は7月末で前年比約5割増と依然高水準で、前記値上げ交渉難航もこうした需給の実勢悪を映じたものである。

木材……外材では、米材が下げ止まり商状を続けたものの、南洋材、北洋材は引き続き下落し、小幅ながら上昇基調に転じていた内地材でも、8月下旬以降のき材が小幅訂正安、杉等その他の材も上昇一服となった。

米材は、大手輸入商社筋が過剰在庫を抱えながらも収益対策として引き続き販売量を極度に絞っているうえ、円安に伴う輸入コストの上昇も加わって依然として強気の売り唱えを崩していない。これに対して内地材が上昇一服となり、南洋材が続落したのは、梅雨明け後の実需の回復度合いが期待外れであったため問屋、末端工務店筋の在庫補充買いが一服したこと、これまでの市況の反発をながめて製材業者の一部が在庫の放出に向かったこと(内地材)、インドネシア等主力産地が需給緩和をながめ原木出し値を大幅に引き下げたこと(南洋材)によるものである。

化学品……合成樹脂は、8月上旬に塩ビが、また下旬にはポリエチレン、ポリプロピレン、ポリスチレン等主要品目がそれぞれ値上げ事前了承制度の対象から外され、これに伴い樹脂メーカーは原料ナフサ高騰などを理由としてあいついで値上げ交渉を開始しているが、市中相場は前月に引き続き弱保合いで推移した。これは、土建・住宅(塩ビパイプ等)、自動車(シート等)、家電(キャビネット等)など主要需要業界が、夏期休暇にからめた減産強化を背景に原材料手当て量の大幅削減を図ったため、メーカー出し値の引上げがほとんど浸透するに至らなかったためである。このため、これまで高水準の生産を続け在庫の積み増しをはかってきた樹脂メーカーでも、塩ビ等一部品種では累増をみた在庫を調整すべく8月から減産(4~6

月平均比10~20%減)を開始するに至っている。

一方、基礎薬品類は、硫酸(肥料向け)が引き続き強含みを続けた反面、カセイソーダが紙・パルプ、合繊向けの需要減退により在庫圧迫感が強まったため弱含み商状で推移し、またこれまで強含み基調にあった塩酸(塩ビ向け)、メタノール(合板接着剤関連)も生産は総じて順調な反面、需要が一段と落ち込んだため弱保合いとなるなど、区々ながらも、総じてみれば保合い圏内の動きにとどまった。

紙……8月の市況をみると、全般的な需給の引き緩みから、アート・コート紙、白板紙が小幅軟化するなど、総じて弱地合いが続いた。

これは、不需要期にあたるうえ、①期待されていた輸出も、海外の需給緩和などから先細り懸念が強まったこと(上質紙、アート・コート紙、板紙)、②商業印刷向けが依然不振のアート・コート紙から上質紙への生産転換が行われ、上質紙の荷もたれ感が強まっていること、③紙節約ムードの浸透などから、板紙の需要が極端に落ち込み、在庫圧迫から換金売りが漸増していること、④紙不足時に成約し5~6月を中心に入着集中をみた輸入紙が、品質面の問題もあって売れ残りが目立ち、これが荷もたれ感を拍車していること、などによるとみられている。

この間、輸入チップ、化学薬品等原料のコスト・アップをながめて上質紙と段ボール原紙の一部にメーカー建値引上げの意向があるものの、上記のような需給地合いからみて当面値上げはむりとの見方が多い。

砂糖……国内相場(現物)は、値上げ見越しの仮需が再び台頭したため、1kg当り5円程度続伸した。

菓子、飲料向け等を中心に実需は依然低調に推移しているが、海外原糖が300ポンド/英トン台(史上最高値)となり、現在の凍結価格では大幅な採算割れとなるため、9月中にも2~3割方再値上げされる公算が強まり、ユーザーの仮需もかなり活発化している。

## (卸売物価——統騰)

卸売物価は、7月に前月比+1.1%(前年同月比+34.2%)と、2ヵ月連続して1%を上回る上昇となったあと、8月に入ってから、上旬は円安の影響もあって前旬比+0.4%、中旬には、食料品の上昇などから+0.3%の統騰となった。

品目別にみると、上旬には海外高と円安から、石油・石炭・同製品、非鉄金属、鉄鋼、金属素材が上伸したが、一方実需不振から繊維製品、製材・木製品が統落、また中旬には、食料品が騰勢を強めたほか、石油・石炭・同製品、化学製品が統騰した反面、繊維製品は統落、非鉄金属は小幅反落となった。

## (工業製品生産者物価——騰勢やや強まる)

7月の工業製品生産者物価は、前月比+0.8%とやや騰勢を強めた。品目別にみると、普通鋼鋼

材がメーカー建値の大幅引上げを映じて急騰したほか、石油・石炭・同製品、特殊鋼鋼材・その他、パルプ・紙・同製品が上昇した反面、非鉄金属、繊維製品が統落した。

## (消費者物価——8月&lt;東京都区部、速報&gt;は騰勢鈍化)

8月の消費者物価(東京都区部、速報)は、果物の急騰を主因に食料が上伸したものの、夏物衣料が統落したのをはじめ全般に落ち着いた動きを示したことから、総合では前月比+0.8%(前月同+1.9%)、前年同月比+23.0%と、騰勢はやや鈍化した。また季節商品を除く総合では、前月比+0.2%とかなりの騰勢鈍化(前月同+1.2%)となった。

7月の全国消費者物価は、被服が下落したものの、食料が長雨の影響から大幅に上伸したほか、

## 卸売物価指数の推移

(単位・%)

	ウ エ イ ト	49年		49年			49年7月			49年8月	
		1~3月 平	4~6月 均	5月	6月	7月	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬
総平均	100.0	14.6	3.4	0.6	1.3	1.1	0.3	0.5	0.5	0.4	0.3
食料品	13.4	8.5	2.4	1.1	0.8	1.9	0.4	1.5	0.3	0.1	0.8
非食料農林産物	2.4	10.4	-7.8	-1.2	-1.7	1.4	0.2	1.1	3.1	0.8	0.3
繊維製品	7.8	3.6	-6.3	-0.9	-2.9	-2.4	-1.3	-0.4	-1.4	-1.1	-1.1
製材・木製品	3.8	9.5	-7.6	-2.0	-0.8	-1.1	-0.2	0.1	-0.4	-0.2	-0.2
パルプ・紙・同製品	2.8	26.4	-0.4	-0.2	-0.3	1.6	1.4	0.1	0.4	0.2	0
金属素材	1.9	18.1	12.7	4.7	-4.8	-1.6	-0.5	2.4	-1.6	2.3	1.9
鉄鋼	9.4	8.0	4.4	2.5	4.6	7.1	1.4	3.8	2.4	0.6	0.4
非鉄金属	4.2	20.0	4.6	-1.2	-6.1	-8.4	-4.4	-3.7	1.1	2.6	-1.1
金属製品	3.8	22.5	4.0	0.7	0.9	0.3	0.4	0.1	-0.2	0	0.1
電気機器	9.0	10.1	3.2	0	1.5	0.6	0.1	0.1	-0.3	0.3	0
輸送用機器	6.8	12.6	2.3	0.2	1.1	0.7	0.1	0.2	0.2	0.4	0
一般・精密機器	10.8	12.9	3.9	1.1	0.6	0.9	0.5	0.3	0.3	0.2	0
化学製品	8.8	19.2	0.2	-0.3	1.6	1.4	0.3	0.1	0.5	0.4	0.5
石油・石炭・同製品	4.6	52.3	30.3	3.7	4.4	3.5	1.5	1.0	1.7	1.3	0.6
窯業製品	3.1	20.5	2.4	0.2	0.1	0.7	0.1	-0.1	1.6	0.5	0.8
雑品目	7.6	14.4	4.4	0.3	9.3	1.4	1.5	-0.2	0.2	0.2	0.2
工業製品	85.5	13.6	2.4	0.4	0.7	0.7	0	0.4	0.5	0.3	0
大企業性製品	63.3	13.6	3.7	0.5	0.8	1.3	0.1	0.6	0.6	0.4	0.1
中小企業性製品	20.1	13.8	-1.7	-0.2	-0.6	-0.6	-0.2	0.1	-0.2	-0.1	-0.2
非工業製品	14.5	20.5	7.9	1.8	4.7	2.9	1.7	1.2	0.8	0.7	1.2

(注) 日本銀行調べ。

消費者・輸出入物価指数の推移

(単位・%)

	ウエ イト	49 年			49 年			最近月 の前年 同月比	
		1~3月 平均	4~6月 平均	6月	7月	8月			
消 費 者 京 物 価	総 合	100.0	9.4	5.0	0.7	1.9 *	0.8 *	23.0	
	(季節商品を除く)	91.3	7.9	5.0	1.0	1.2	0.2	21.5	
	食 料	40.3	13.5	3.4	- 0.2	2.9 *	2.7 *	27.5	
	住 居	11.8	11.9	5.1	0.3	0.6	0.1	25.6	
	光 熱	3.7	1.7	4.4	13.8	1.1	0.1	18.9	
	被 服	12.4	4.3	8.1	2.1	- 1.6	- 3.0	19.2	
	雑 費	31.8	5.9	5.9	0.1	2.8	0.6	18.3	
	特 殊 分 類	農 水 畜 産 物	16.6	16.1	1.7	- 2.1	6.6	...	25.7
	工 業 製 品	43.6	10.7	5.7	1.3	0.1	...	27.9	
	うち大企業製品	19.8	11.7	4.9	1.6	0.9	...	26.4	
中小企業製品	23.8	10.2	6.4	1.1	- 0.4	...	29.1		
サ ー ビ ス	37.0	5.0	5.5	1.2	0.5	...	15.0		
全 国	総 合	100.0	9.9	4.7	0.5	2.0	...	25.2	
	(季節商品を除く)	91.0	8.7	5.0	1.2	1.4	...	24.5	
輸 出 入 物 価	輸 出		13.6	4.8	1.6	3.7	...	39.2	
	輸 入		31.3	10.9	1.5	3.2	...	70.5	
	交 易 条 件		-13.1	- 6.0	0	0.5	...	-18.3	

(注) 1. 消費者物価は総理府統計局調べ、輸出入物価は日本銀行調べ。  
2. \* 印は速報。

新聞代の値上げから雑費もかなりの上伸となったため、総合では前月比+2.0%(前年同月比+25.2%)の大幅上昇となった。また季節商品を除く総合でも、前月比+1.4%(前年同月比+24.5%)とかなりの上昇を示した。

(輸出入物価——統騰)

7月の輸出入物価は、繊維品が統騰したものの、金属・同製品、化学品などが統騰したうえ円安の影響もあって前月比+3.7%(前月同+1.6%)の大幅統騰となった。また輸入物価も、繊維品、金属が小幅統騰したものの、海外市況の高騰を映じて食料品、雑品目が上昇し、鉱物性燃料も統騰したうえ、円安の影響もあって前月比+3.2%(前月同+1.5%)の大幅統騰(前年同月比+70.5%)となった。

この結果、7月の交易条件指数(74.0、45年=100)は前月比+0.5%と、9か月ぶりの好転となった(前月は保合)。

◇国際収支の赤字幅は大幅縮小

7月の国際収支は、総合収支で210百万ドルの赤字と赤字幅は前月(1,277百万ドル)に比べ大幅に縮小し、48年3月に総合収支が赤字に転化して以来最も小幅の赤字となった。

これは、貿易収支が季節的要因もあり一段と黒字幅を拡大したほか、前月みられた大口の対外直接投資、対外移転支払等がはく落したこと、さらに、短期資本収支が輸入ユーザンスの享受増大からかなりの流入超となったことなどによる。

7月の貿易収支を季節調整後で見ると、輸入が鉄鋼原材料、砂糖のほか、前月からの

ずれ込みがみられた原油を中心に、前月比+2.6%と増加した一方、輸出も鉄鋼、自動車、造船、化学製品等の好伸を主因に高水準を持続(前月比+1.1%)したため、収支じりでは、120百万ドルの黒字となった(前月黒字185百万ドル)。

長期資本収支の流出超額は430百万ドルと前月(同625百万ドル)に比べ縮小した。これは、外国資本の流出超額が株式を中心とする対日証券投資の流出超が引き続き高水準であることを映じ137百万ドルと前月(同116百万ドル)を上回ったものの、本邦資本の流出超額が前月みられた石油関係の大口対外直接投資のはく落を主因に293百万ドルと前月(同509百万ドル)に比べ小幅にとどまったためである。

一方、短期資本収支は、船舶前受金等の貿易信用の決済が増加したものの、BCユーザンスの享受が増大したことなどから、前月(流出超315百万ドル)とは様変わりになり267百万ドルの流入超となっ



国 際 収 支

(単位・百万ドル)

	48 年		49 年			49 年			48年7月
	10~12月	1~3月	4~6月	5 月	6 月	7 月			
経 常 収 支	△ 315	△ 3,274	△ 2,478	△ 1,074	△ 581	△ 202	194		
貿易収支	1,040	△ 1,835	△ 914	△ 569	34	339	484		
輸 出	10,910	10,104	13,471	4,537	4,765	5,091	3,256		
輸 入	9,870	11,939	14,385	5,106	4,731	4,752	2,772		
貿易外収支	△ 1,263	△ 1,394	△ 1,422	△ 478	△ 509	△ 528	△ 265		
移 転 収 支	△ 92	△ 45	△ 142	△ 27	△ 106	△ 13	△ 25		
長期資本収支	△ 2,897	△ 1,591	△ 1,037	△ 248	△ 625	△ 430	△ 1,012		
本邦資本	△ 2,441	△ 1,238	△ 890	△ 189	△ 509	△ 293	△ 963		
外国資本	△ 456	△ 353	△ 147	△ 59	△ 116	△ 137	△ 49		
基礎的収支	(△ 3,212)	(△ 4,865)	(△ 3,515)	(△ 1,322)	(△ 1,206)	(△ 632)	(△ 818)		
(△ 3,816)	(△ 4,236)	(△ 2,719)	(△ 792)	(△ 1,055)	(△ 851)	(△ 1,027)			
短期資本収支	72	872	△ 244	98	△ 315	267	207		
誤差脱漏	△ 713	△ 144	720	222	244	155	△ 46		
総 合 収 支	△ 3,853	△ 4,137	△ 3,039	△ 1,002	△ 1,277	△ 210	△ 657		
金 融 勘 定	△ 3,853	△ 4,137	△ 3,039	△ 1,002	△ 1,277	△ 210	△ 657		
外貨準備増減	△ 2,549	180	1,003	454	262	△ 225	△ 42		
その他	△ 1,304	△ 4,317	△ 4,042	△ 1,456	△ 1,539	15	△ 615		
外 貨 準 備 高	12,246	12,426	13,429	13,167	13,429	13,204	15,158		
為 銀 対 外 ポ ジ シ ョ ン	△ 3,465	△ 7,765	△ 11,896	△ 10,313	△ 11,896	△ 11,900	△ 1,036		

- (注) 1. カッコ内は貿易収支のみを季節調整した基礎的収支。  
 2. 短期資本収支は金融勘定に属するものを含まない。  
 3. 金融勘定の△印は純資産の減少。

輸 出 入 指 標 の 推 移

(季節調整済み、単位・百万ドル)

	国際収支ベース			通 関		輸 出	輸 出	輸入承認・
	輸 出	輸 入	貿易じり	輸 出	輸 入	信用状	認 証	届 出
48年10~12月	(+ 3,395 11.8)	(+ 3,250 12.9)	145	(+ 3,447 10.5)	(+ 3,858 12.6)	(+ 2,543 4.9)	(+ 3,697 10.9)	(+ 4,398 15.1)
49年1~3月	(+ 3,687 8.6)	(+ 4,089 25.8)	△ 402	(+ 3,759 9.0)	(+ 4,751 23.1)	(+ 3,014 18.4)	(+ 3,956 7.0)	(+ 5,671 29.0)
4~6月	(+ 4,595 24.6)	(+ 4,634 13.3)	△ 39	(+ 4,695 24.9)	(+ 5,375 13.1)	(+ 3,362 11.6)	(+ 4,973 25.7)	(+ 6,131 8.1)
49年  4月	(+ 4,169 12.8)	(+ 4,433 2.4)	△ 264	(+ 4,291 15.8)	(+ 5,102 2.3)	(- 3,034 3.7)	(+ 4,636 12.6)	(+ 6,664 25.2)
5月	(+ 4,814 15.5)	(+ 4,853 9.5)	△ 39	(+ 4,901 14.2)	(+ 5,562 9.0)	(+ 3,561 17.4)	(+ 4,970 7.2)	(- 5,944 10.8)
6月	(- 4,802 0.2)	(- 4,617 4.9)	185	(- 4,893 0.2)	(- 5,462 1.8)	(- 3,491 2.0)	(+ 5,314 6.9)	(- 5,785 2.7)
7月	(+ 4,856 1.1)	(+ 4,736 2.6)	120	(+ 4,985 1.9)	(+ 5,678 4.0)	(+ 3,766 7.9)	(- 5,154 3.0)	(+ 5,956 3.0)

- (注) 1. 四半期計数は月平均。  
 2. カッコ内は前期(月)比増減率(%)。

## 通関輸出の内訳

(単位・百万ドル)

た。

金融勘定をみると、為銀ポジションは外銀借入れが著増した反面、ユーロ・マネーが1年4か月ぶりに返済超となったことなどから4百万ドルの悪化と久々に小幅悪化にとどまり、7月末の負債超過額は11,900百万ドルとなった(前年同月1,036百万ドルの負債超)。

この間、外貨準備高は225百万ドルの減少を示し、月末残高は13,204百万ドルとなった。

## (輸出——高水準を継続)

7月の輸出(国際収支ベース)は、季節調整後で前月比+1.1%と引き続き好伸、原計数の前年同月比も+56.4%(通関ベース、同+56.1%)と高水準を継続した(通関ベースの邦貨表示額では同+69.1%、前月同+72.5%)。

品目別(通関ベース)にみると、鉄鋼、化学製品等が好調な伸びを示したほか、自動車、二輪自動車、船舶等が前月に引き続き高水準で推移した。

通関輸出の前年同月比伸び率を数量と価格に分けてみると、輸出価格は、鉄鋼、化学製品では引き続き上昇したものの、繊維、弱電製品価格の頭打ちなどから+30%(前月+36%)と騰勢はやや鈍化ぎみとなった。一方、数量ベースでは、海外需要おう盛の鉄鋼、二輪自動車、また、国内需給緩和から輸出圧力の高まっている繊維、合板等を中心に+20%と一段と好伸した(前月+19%)。

地域別にみると、米国向け(前年同月比+41%)は鉄鋼、二輪自動車等を中心に高水準の伸びを継続しているほか、中近東(同+120%)、中南米(同+139%)、共産圏(同+116%)向けも鉄鋼、自動車、繊維を中心に好調裡に推移した。この反面、西歐向け(同+22%)は船舶の落込みから、東南アジア向け(同+51%)は繊維の不振を映じて増勢が鈍化した。

先行指標である輸出信用状接受高(季節調整済み、前月比)は、7月に+7.9%と著伸したあと、8月も鉄鋼、化学製品等を中心に+2.8%と増加傾向を継続(原計数の前年同月比は+54.0%)している。

	48年	49年		49年	
	10~12月	1~3月	4~6月	6月	7月
食料品	281 (+46)	204 (+26)	198 (+12)	78 (+30)	74 (+14)
魚介類	194 (+60)	149 (+67)	117 (+16)	45 (+29)	43 (+13)
繊維・同製品	987 (+20)	845 (+27)	1,078 (+38)	381 (+39)	391 (+42)
合織糸	137 (+25)	121 (+30)	160 (+51)	60 (+61)	65 (+91)
綿織物	61 (-7)	48 (+15)	65 (+44)	21 (+33)	22 (+43)
合織織物	307 (+25)	262 (+33)	328 (+41)	114 (+39)	114 (+34)
化学製品	622 (+21)	656 (+45)	927 (+77)	340 (+84)	389 (+112)
非金属鉱物製品	159 (+22)	143 (+28)	187 (+28)	68 (+33)	63 (+16)
金属・同製品	2,156 (+48)	2,113 (+56)	3,146 (+99)	1,180 (+108)	1,259 (+115)
鉄鋼	1,709 (+60)	1,663 (+61)	2,366 (+95)	881 (+100)	955 (+111)
機械機器	6,065 (+34)	5,555 (+32)	7,146 (+51)	2,442 (+52)	2,608 (+38)
(船舶を除く)	4,870 (+28)	4,576 (+35)	5,623 (+41)	1,974 (+45)	2,081 (+41)
事務用機器	251 (+61)	158 (+2)	180 (-5)	61 (-16)	64 (-7)
テレビ	146 (+4)	151 (+10)	196 (+28)	68 (+36)	67 (+15)
ラジオ	346 (+17)	277 (+16)	365 (+17)	131 (+14)	132 (+23)
自動車	1,044 (+22)	1,099 (+36)	1,342 (+54)	468 (+72)	486 (+44)
二輪自動車	255 (+17)	308 (+69)	315 (+59)	115 (+61)	123 (+82)
船舶	1,195 (+62)	978 (+20)	1,523 (+100)	467 (+93)	527 (+26)
光学機器	284 (+29)	282 (+50)	331 (+40)	112 (+28)	131 (+56)
テープレコーダー	214 (+8)	165 (+5)	199 (-2)	70 (-4)	69 (0)
その他	838 (+19)	792 (+32)	1,033 (+52)	364 (+49)	399 (+51)
合計	11,108 (+33)	10,318 (+37)	13,741 (+59)	4,853 (+62)	5,184 (+56)
(船舶を除く)	9,913 (+30)	9,339 (+39)	12,202 (+55)	4,386 (+60)	4,656 (+61)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。

(輸入——原油、鉄鋼原材料を除けば着着き)

7月の輸入(国際収支ベース)は、季節調整後で前月比+2.6%と前月(同-4.9%)落込みのあと再

## 通関輸入の内訳

(単位・百万ドル)

	48年	49年		49年	
	10~ 12月	1~3月	4~6月	6月	7月
食料品	1,898 (+ 83)	1,783 (+ 69)	2,174 (+ 45)	689 (+ 25)	679 (+ 27)
肉類	232 (+ 91)	146 (+ 33)	132 (- 46)	41 (- 60)	35 (- 61)
魚介類	337 (+100)	216 (+ 55)	265 (+ 6)	96 (+ 4)	89 (- 1)
小麦	200 (+ 85)	268 (+101)	358 (+119)	100 (+ 61)	102 (+ 65)
とうもろこし	200 (+125)	210 (+102)	220 (+105)	60 (+107)	67 (+ 50)
砂糖	136 (+ 29)	140 (+ 83)	222 (+120)	79 (+ 86)	111 (+136)
原燃料	6,098 (+ 66)	8,447 (+108)	10,480 (+102)	3,498 (+ 88)	3,637 (+114)
羊毛	249 (+ 72)	226 (+ 2)	129 (- 59)	39 (- 67)	36 (- 64)
綿花	172 (+ 21)	262 (+ 34)	278 (+ 45)	85 (+ 31)	90 (+ 72)
鉄鉱石	456 (+ 26)	533 (+ 35)	469 (+ 25)	150 (+ 14)	176 (+ 32)
鉄鋼くず	84 (+130)	77 (+ 5)	109 (- 2)	32 (- 31)	57 (+ 38)
非鉄金属鉱	541 (+ 87)	632 (+ 96)	815 (+ 83)	247 (+ 68)	248 (+ 21)
大豆	194 (+ 51)	228 (+ 66)	236 (+ 6)	61 (- 23)	60 (- 20)
木材	982 (+ 98)	911 (+ 46)	1,120 (+ 13)	433 (+ 13)	317 (+ 35)
石炭	387 (+ 36)	414 (+ 46)	530 (+ 55)	183 (+ 73)	258 (+120)
原油	2,004 (+ 76)	3,819 (+233)	5,012 (+274)	1,648 (+251)	1,834 (+296)
化学製品	646 (+ 99)	667 (+ 89)	765 (+ 85)	242 (+ 62)	232 (+ 56)
機械機器	1,032 (+ 57)	1,140 (+ 51)	1,226 (+ 59)	376 (+ 45)	389 (+ 21)
航空機	41 (- 30)	168 (+119)	155 (+652)	16 (+257)	28 (- 15)
その他	1,974 (+102)	1,859 (+ 73)	2,093 (+ 37)	692 (+ 30)	655 (+ 14)
合計	11,648 (+ 75)	13,934 (+ 91)	16,776 (+ 79)	5,507 (+ 64)	5,593 (+ 71)
工業用原料	7,747 (+ 74)	10,117 (+102)	12,362 (+ 93)	4,123 (+ 80)	4,222 (+ 98)
消費財	2,895 (+ 88)	2,694 (+ 76)	3,152 (+ 43)	999 (+ 24)	986 (+ 20)
一般消費財	713 (+110)	653 (+ 92)	700 (+ 55)	217 (+ 37)	228 (+ 19)
資本財	933 (+ 54)	1,060 (+ 53)	1,136 (+ 61)	349 (+ 47)	356 (+ 20)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。

び増加、原計数の前年同月比でも +71.4%(通関ベース、同 +70.6%)と高い伸びを示した(通関ベースの邦貨表示額では同 +84.6%、前月同 +74.3%)。

品目別(通関ベース)にみると、原油(1,834百万ドル、前月1,648百万ドル)が前月からのずれ込みもあって増加、また鉄鋼原材料、砂糖が大幅な伸びを示した反面、非鉄金属鉱、繊維原料、木材、食料等は前月比減少ないし横ばいとなった。

通関輸入額の前年同月比伸び率を数量と価格に分けてみると、輸入価格は、繊維原料(羊毛)、一部食料品(肉類)、非鉄金属鉱等が一段と下落したことを主因に +66%と伸び率が低下(前月+72%)した。一方、輸入数量は、原油(25.6百万kl、前年同月比+11%)が前月からのずれ込みで入着が増加したほか、鉄鋼原材料、砂糖等が再び前年水準を上回ったことから +3%と微増した。

地域別にみると、原油入着増を映じて中近東(前年同月比+310%)、東南アジア(同+63%)が増加した反面、食料品、繊維原料(羊毛)、木材の低調から米国(同+27%)、カナダ(同+22%)、豪州・ニュージーランド等(同+11%)の伸び率鈍化が目だった。

8月の輸入承認・届出額(季節調整済み、前月比)は7月に+3.0%と増加したあと、-7.4%と再び減少した。品目別には、一部非鉄金属鉱が増勢を強めたものの、原油、繊維原料、食料品等大半の品目が増勢鈍化ないし前年水準を下回った。

7月の輸入素原材料在庫率指数(45年=100)は、同消費(季節調整済み、前月比)が-1.1%と減少した反面、同在庫が+3.8%とかなりの増加をみたため、119.9と前月比5.6ポイントの上昇を示した。